
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 103

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2041. 算術癖
- 2042. 二つの印象深い夢
- 2043. 音楽理論と作曲理論の学習の再開
- 2044. 半閉半開なる人生
- 2045. 作曲の意味と現在の課題
- 2046. 時のリズム
- 2047. この瞬間のためにあったこれまでの日々
- 2048. フォーレの楽譜とフーガの書籍
- 2049. メタアナリシスと成人発達研究
- 2050. 二つの夢
- 2051. 今日の活動
- 2052. 早稲田大学ラグビー部元監督中竹竜二さんとの対談より
- 2053. 内在的な力
- 2054. フローニンゲン大学でのMOOCに関する研究インターン
- 2055. ボンでの出来事
- 2056. 春の予感
- 2057. 環境適応と環境包摂
- 2058. グルジアへの訪問
- 2059. 課題の完了
- 2060. 静寂さへの道

「75万円、100万円、60万円・・・」

数年前に京都の街を歩いていた時の記憶が突然甦ってきた。今、私は北欧にほど近いオランダのフローニンゲンという街で生活を営んでいる。それにもかかわらず、数年前に京都を訪れた際の記憶がふと蘇り、あたかも自分が京都にいるかのような感覚に陥っていた。

あれは桜の綺麗な春の季節だったと思う。ちょうどその頃はフローニンゲンで生活することが決まっていた時期であり、日本を離れる前に、私はもう一度京都に足を運んでおきたいと思った。

夕方、京都の街を歩いている最中、数十歩歩くごとに「75万円、100万円、60万円・・・」と何やら金額を計算している自分がいたことを思い出した。これまでは無意識的に行っていたが、私は道を歩いている最中に居住用のマンションやアパートを見ると、その家賃収入を計算するような癖があるようなのだ。別に私は守銭奴ではなく、単に算術が好きなのである。

これは家賃収入に関する計算だけではなく、街で店に入る際にも似たようなことを行う癖がある。先日、フローニンゲンの街の中心部にある歯医者に行った時、この歯医者の方の月間の収益を計算している自分がいた。持参した音楽理論のテキストを開く前に、そうした計算を頭の中で無意識的に行っていたようなのだ。とかく自宅の中ではそのようなことはしないため、時折街に出かけることが何らかの刺激となり、そうした計算に興じてしまうのだろう。

そうした記憶がさらに別の記憶を呼んだ。大学時代に、ゼミのある友人が面白いゲームを教えてくれた。そのルールは極めて単純で、一桁の四つの数字を四則演算を用いて10を作るというものがある。ゼミの友人たちとある授業に参加していた時、授業そっちのけで紙に四つの数字を書き、それらの数字を用いて10を作るゲームに興じていたことを思い出す。このゲームはいついかなる時にもできるということが特徴であり、大学卒業後も、道行く車のナンバープレートを見て、そこに記載されている数字を用いてこのゲームを行うことがよくあった。

今、欧州で生活をしていると、車のナンバープレートの数字が四つでないものの方が多いため、道行く車を見てもなかなかこのゲームができないのだが、それでも似たようなことを自然に行っている

自分がいるのは確かだ。そのようなことに興じる自分はおそらく、単純に算術が好きなのだろう。あるいは意味のないものを組み合わせて、何か意味のあるものを作り上げることが好きなのかもしれない。また一つ私の知らなかった自分の側面が明らかになったところで、今日の仕事に取り掛かろうと思う。フローニンゲン:2018/1/22(月)10:12

No.676: Experimentation

I determined to experiment creating with the same rhythm but with a different key and melody, which simultaneously generates a different harmony. This is a total experimentation. Although I don't have any hypotheses beforehand, this experimentation will reveal something intriguing to me. Groningen, 18:27, Monday, 1/22/2018

2042. 二つの印象深い夢

新たな週が始まってからの二日目の朝。今日も十分な睡眠を取り、六時半過ぎから今日の活動を開始させた。

昨夜の夢の二つの場面がとても印象に残っている。一つはある無人島を探索するような内容だった。

私はある日本人の知人の方と空を飛びながら一つの無人島に向かっていた。空の様子からすると、どうやら私たちが飛んでいた場所は日本の領土の上空ではないらしい。どうも欧州のどこかの国の領土の上、しかもそれはアイスランドなどの北部の国のようだった。

二人で飛行を続けていると徐々に無人島が姿を現し始めた。私たちは、この無人島の探索を兼ねて、その土地で少し休暇を取る計画を立てていた。しかし、上空からこの無人島を眺めると、そこにはなかなか足を下ろしてゆっくり休憩できるような場所はなかった。足の下ろせそうな場所の多くは断崖絶壁であった。

気づかない間に私たちの飛行高度が下がってきており、それは身体の疲労の表れであった。すぐさま着地地点を見つけなければ、このまま波の荒い海に落ちてしまうという危惧があった。そのため、

私たちはとりあえず足が下ろせそうな岩陰に着地した。そこは大人二人がかろうじて立っていられるような場所であり、そんな場所ではゆっくりと休憩などできない。

私:「あっちにもう少し足場の良い場所があるようです。もう一度飛んであちらに行きませんか？」

知人:「そうですね、そうしましょう。ただ、私にはもう一度空を飛ぶエネルギーが残っていないようなんです」

私:「では私につかまってください。なんとかあっちの場所まで行きましょう。そこでならゆっくりできそうですよ」

知人:「ありがとうございます。ではお言葉に甘えてそうしましょう」

そこから私たち二人は、目を凝らせばなんとか見える浜辺の地点まで再度飛んで向かうことにした。知人が私につかまっているため、通常よりも飛行にエネルギーを要することはわかっていた。私にもすでに疲労が見えたため、なんとか力を振り絞って、まずはその場からまっすぐ上に身体を浮かせた。だが、なかなか高度が上がらず数メートルほどの高さまでしか上がらなかった。

岩陰から海に向かって二人の身体を前に出すことに一瞬恐怖が伴ったが、恐怖をすかさず振り払い、私たちは再度飛び立った。岩陰から前に飛び出した瞬間に、二人の身体は海面ギリギリまで一度高度が下がったが、なんとか持ち返し、安定した飛行に十分な高度を保つことができ始めた。すると、私につかまっている知人が声をかけた。

知人:「実は今回の飛行が初めてだったんです」

私:「そうだったんですか！それは色々大変でしたね」

知人:「ええ、飛行に伴う恐怖と飛行の難しさを存分に味わいました」

私はその時になって、知人の方が今回初めて飛行を行ったことを知って少々驚いた。いや、随分と驚いていた。初回の飛行で無人島に行くというのは諸々の意味で若干無謀であったからだ。

無事に目的の砂浜に到着すると、砂浜の奥には様々な植物が生えている姿が見えた。その中でも、特に鮮やかな色を持つ花々が輝いているように見えた。私たちはそうした花々の方に向かって歩き出し、そこで休もうとしたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はクジラになっていた。しかも非常に大きなシロナガスクジラである。単純に私はクジラになって海を泳いでいたのではなく、そこでは少しばかり奇妙なことが起こっていた。私は友人たちとともに、海岸からそのクジラを眺めていたのである。つまり、私の意識はこの世界に二つあり、一つは海を優雅に泳いでいるシロナガスクジラの意識のそれと、海岸でそのクジラを眺めている人間としての意識であった。

私はクジラとして海を泳いでいるのに、陸上の私が友人たちにその姿を解説するのが幾分滑稽であった。水しぶきを上げてみると、友人たちが歓声を上げている。

私はしばらくクジラとしての自己と人間としての自己を保っていた。クジラとして優雅に海を泳いでいると、クジラが遠くの海へ向かうにつれて、クジラとしての私の意識は薄らいでいった。海岸からそのクジラの姿が見えなくなった時、クジラとしての私の意識は消滅し、人間としての意識だけが残った。そしてその瞬間に夢から覚めた。フローニンゲン:2018/1/23(火)07:40

【追記】

改めて上記の夢の内容を振り返ると、意識(consciousness)というものが複数形を取らないにもかかわらず、夢の中の私は二つの異なる意識を持っていたことが興味深い。もしかすると、私たちは以外と複数の意識を持つこともできてしまうのではないかと思わされる。そうなってくると、人間の意識というものが一体なんなのかがますます謎めいてくる。フローニンゲン:2019/1/15(火)09:26

No.677: To be an Eternal Creator

I'll never be a critic. Instead, I'll continue to be a creator. Once people become a critic, they are inclined to stop their creative activities; or at least their creative energy tends to decline dramatically. Even if I had time to write a critical comment to others' works, I would not spend my time in that way. Rather, I would devote myself to create something new by spending that time. Groningen, 19:34, Monday, 1/22/2018

2043. 音楽理論と作曲理論の学習の再開

昨日から再び音楽理論と作曲理論の学習に力を入れ始めた。ここ数週間はもっぱら曲を作ることに集中しており、作曲実践を通じて作曲技術の向上を図ろうとしていた。当然ながら、実践に勝る学習方法はないのだが、実践ばかりを行っていても限界があることは確かである。過去の作曲家が経験から導き出した理論を学ぶことは、自分の作曲技術をまた違う次元に引き上げくれる力を持っていると実感している。

以前に一度読み通していた書籍に昨夜から再度取り掛かっている。その書籍は四つのパートからなる作曲方法を専門的に扱うものであり、再度本書を読んでもみると、自分の頭の中から抜け落ちている項目やそもそも見落としていた項目が随分と多いことに気づかされた。特に、テノールとバスから構成されるベースの部分に関して、私は頻繁に“overlapping”という禁止事項を知らず知らずに行っていたことに気づかされた。四つのパートからなる曲を作る際にはいくつかの原則のようなものがあり、それらの原則が完全に頭の中に入っていなかったことを知る。

作曲理論に関して学ぶべきことがまだまだ山のように残っており、その探究に終わりはないであろうから、毎日少しの時間でも良いので必ず作曲理論のテキストを開こうと思う。テキストを開くたびに必ず新しい発見があることはとても喜ばしい。

作曲理論に加えて、一昨日から再び音楽理論を学び始めた。音楽理論は演奏者のみならず、当然ながら作曲者にとっても重要である。音楽理論のテキストは作曲の技法について書かれているわけではなく、音楽の原理を解説しているのだが、そうしたテキストの中にも作曲に有益なヒントがいくつも存在している。また、作曲をする上で必要となる音楽の原則的な知識を学ぶ上でも音楽理論は大事である。以前に一度読み通していた300ページほどの音楽理論のテキストと、150ページほどの比較的薄めのテキストを今後も繰り返し読み込んでいきたいと思う。

音楽理論のテキストについても作曲理論のテキストと同様に、開くたびに新たな発見がある。発見に伴うそうした純粋な喜びは、どこか私が発達理論を学び始めていた頃の感情と非常に近いように思える。発達科学に関する探究の現在の喜びは、それを始めた頃の喜びとは質的に異なったものになっていることを考えると、音楽理論や作曲理論を学ぶ喜び、そして作曲に伴う喜びは変容していくに違いない。

今日も意図的に時間を設け、音楽理論と作曲理論を学んでいく。そして、ちょっとした隙間の時間を活用してそれらの学びを深めていきたいと思う。フローニンゲン:2018/1/23(火)08:00

No.678: Procedure of New Practice

From today, I'll engage in more systematic practice for music composition. The first step is to decompose a work that I want to refer to into a bone of rhythmic structure. Here, my intention is to learn a sense of rhythms. The second step is to compose my music based on the rhythmic structure, referring to the actual work. The final step is to compose music without looking at the actual work. In this way, I can compose twice on the basis of one work from which I want to learn. Groningen, 19:42, Monday, 1/22/2018

2044. 半閉半開なる人生

さわさわと雨が流れるように降っている。窓ガラスにぼたりぼたりと落ちるような雨ではなく、そっとした風に運ばれてくるかのような雨が今降っている。

今日は午前中に二時間強のオンラインミーティングをある日本企業の協働者の方々と行った。成人発達理論に基づく人材育成プログラムの開発も順調に進んでおり、本プログラムは当初の予定通り今年の春には世に送り出せそうである。

世の中に形として残るものを協働で創造することは、非常に大きな意義を私に感じさせる。人材育成のプログラムにせよ、協働執筆の書籍にせよ、他の方と協働して何かを創っていくということは本当に今後とも継続させていきたい。

創ることが自分の人生であり、創ることではかこの世界の中で生きられないことをもはや自分は知っている。だから創り続けることが大事なのだ。

日々の生活が小川のせせらぎのように営まれているように感じる。この感覚は欧州での生活が一日と長くなるごとに強まっていく。日々の活動の一つ一つが、そして時間そのものが小川のせせらぎのようにどこか一つの場所に向かって流れているかのようなのだ。その一つの場所はわかっている

ようでいてわからない場所である。誰しものが向かうべき場所なのだが、その場所は人それぞれ違う景色を開示するであろう場所だ。

今日も気がつけば夕方四時を過ぎている。ここまでの時間の流れも早かったが、ここからの時間の流れも速いだろう。

昼食時に、自己の生涯を閉じた後の世界について考えていた。生涯を閉じた後、それでも他者の世界が存在し続けるであろうということに対して、妙に不思議な感じがした。それは当たり前と言えども当たり前なのだが、自己の生涯を閉じた後にもまだ動き続けている世界があり続けるということに神妙な気持ちになったのである。すると、自己の生涯を閉じるというのは、もしかすると完全に閉じることはなく、半閉半開の状態なのではないか、という考えが浮かんできた。

おそらく要点は、一人の個人の人生は半分開いたままの状態が終わるということだろう。一人の人間の生涯は肉体の消滅と共に外形上は生涯を閉じると表現されるが、それは実は半分開いたままの状態のような気がしてならない。

その人が残した言葉を含めた種々の創造物、その人にまつわる記憶を持つ人たちがいる限り、その人の生涯は完全に閉じえないのではないだろうか。人生は閉じるのだが閉じないということ、靈魂の不滅性というのはその辺りのことと関係しているだろう。

「2018年1月23日に私は生きていた」ということを書かなければ気の済まない感覚に襲われる。「そして、2018年1月23日のフローニンゲンに雨であった」と書かなければ気の済まない自分がいる。

一人の人間がある一日を生きているということが、これほどまでに奇跡的なことだということに打たれる。一人の人間の人生は必ず閉じ、そして必ず閉じないということに強く打たれる。

生きるということが何なのか、一人の人間の人生とは何なのかという問いは依然として多くの謎を残すが、そうした謎に打たれながら生きることしか自分にはできないようだ。

一羽の鳥が遠方の大空を雨に打たれながら飛んでいく。フローニンゲン:2018/1/23(火) 16:24

I have to keep in mind the limitation of the new practice that I invented.

The limitation lies in the first step. If I decompose a melody into a bone of rhythmic structure, I may have a problem of parts and whole.

I presume that past great composers did not create only rhythms at the beginning of composition but generated a melody that inseparably encapsulates rhythms. Keeping it in mind, I'll continue the new practice. Groningen, 19:49, Monday, 1/22/2018

2045. 作曲の意味と現在の課題

時刻は夕方の五時半を回った。雨が一向に降り続けているのだが、まだ完全な闇が訪れていない。どうやら日が伸びたらしい。相変わらず寒さは厳しいが、季節は春に向けて着実に足取りを進めている。そう思わずにはいられない。

今日も自分のなすべきことに取り組んでいるような一日だった。その中でも一つ、いつものように作曲実践に取り組んでいる中で、バッハの作品は独特の面白さがあることに気づいた。各作品にはバッハの意匠が込められていることは間違いないが、バッハの作品にはどこか遊び心のようなものも含まれている。バッハの楽譜を丹念に眺め、それを範にして曲を作ろうとするとおおよそ一層バッハの遊び心と類まれな技巧がありありと実感される。遊び心と珠玉の技術が織り込まれた作品ほど教育効果のある教材も無いだろう。

昼食後に作曲理論のテキストを読み進めている中でふと、今自分が抱えている現代社会に対する問題意識を曲として表現したい、という思いが再度強く顔をのぞかせた。これは以前から持っていた思いなのだが、それが今日改めて強く自覚された。実際には表現したいと思うこの世界に対する問題意識が様々にある。すでに焦点を当てるべき事柄や取り上げたいと思う社会事象については決まっているのだが、それを表現するための技術が一向に追いつかないという状況にある。

作曲実践を始めてほんのまだ数カ月程度なのであるから、それは高望みであろうが、自分が作曲を行う意味のようなものを求めるとするならば、日々の自己に立ち現れる諸々の思考や感覚を曲と

して表現するだけではなく、この世界に生きる私自身が感じている現代社会に対する問題意識を曲として表現したいと強く思う。その実現に向けて、作曲理論の学習と技術的鍛錬を怠ることなく続けていく。

作曲理論のテキストを読みながら、もし仮に二つの声部で曲を作るならば、ベースはソプラノの音階に対して根音か三度の音を当てていったほうがいいのかどうかということを改めて考えていた。しかし、実際に過去の作曲家の楽譜を見るとそんなことは全くない。確かにソプラノの音に合わせて根音や三度の音を当てていけばコードを作ることができるが、いつでもそのような形でベースを作っていくというのもどこかぎこちないだろう。

ハーモニーの学習を少しずつ進める中で見えてきたのは、やはりメロディーラインを先に作り、その後にベースを作り、仮に四声の曲であれば、アルトとテノールはその後に作っていくという流れが良いような気がしている。

メロディーというのは本当にその作曲者の創造性によって生まれるような気がするが、果たしてベースの動きはどのように生まれるのが最も望ましいのだろうか。今の私はまだ、良いベースラインとは一体どのようなものなのかが体感的によくわかっていない。ある時はソプラノの音に合わせて完全なコードになるように意識的にベースラインを作ってみたり、ある時はソプラノの動きとは全く関係なしに、まるでメロディーを作るのと同じ感覚で、独立した形でベースラインを作ってみたり、またある時はベースの部分だけでコード進行を表すようにベースラインを作ったりしている。

まだ自分の中で明確な基準というものがなく、これも試行錯誤をしながら自分なりのベースラインの作り方を見つけていく必要があるだろう。その補助として、過去の作曲家の楽譜や作曲理論を参照したいと思う。今日はこれからもう少し仕事をし、それが全て終わればまた作曲実践に取り組みたい。

フローニンゲン:2018/1/23(火) 17:43

No.680: Like a Brook

I just finished lunch, and I'll tackle the rest of my work today.

I feel as if my daily life were a brook. Every activity and even time in my daily life is like going somewhere one particular place.

Where is it? Everybody knows it. It is the place to which all of us inevitably go someday.

Groningen, 13:07, Tuesday, 1/23/2018

2046. 時のリズム

週の半ばとなる水曜日を迎えた。一つの週が終わり、新たな週の半ばを迎えるのはこれほどまでに早いものなのだろうか。時の流れは音楽のように多様なリズムで展開されていくが、一つの人生の流れ全体を見通した時、それは一曲全体の特徴を表す一つのリズムとして捉えることができるのかもしれない。今私が感じているこの時の流れは、多様なリズムの中に貫かれている一本の共通線のような一つのリズムであるように感じられる。

今日はどのような日になるであろうか。起床直後の今、そのことについて少しばかり考える。

昨日に引き続き、今日もまたある日本企業との協働プロジェクトの仕事がある。今日から数ヶ月間ほど、成人発達理論をもとにした研修のトライアルをその会社の10名ほどのマネジャー層の方々に行わせていただく。端的に言えば、その研修は成人発達理論をもとにした課題解決型の成長支援コーチングであり、今回のトライアルから得られた示唆をもとに、研修内容をより実りのあるものにしていくことを目的にしている。協働者の方と共に、その会社の文化や組織体制に応じた独自の研修を成人発達理論をもとに構築していくことがより大きな焦点となっている。

午前中にトライアル最初のコーチングセッションがあるため、今朝はまずその準備を再度行いたいと思う。午後からは「応用研究手法」のコースの最後のクラスが行われる。今日のクラスではメタアナリシスに関する話題を取り上げ、最終課題についての説明をロエル・ボスカー教授から受けることになっている。

このコースに関してもあっという間に終わったという感じがしてならない。それは肯定的な意味においてである。このコースのおかげで、これまで知らなかった研究手法、とりわけ教育科学で積極的に活用されている種々の応用的な研究手法について学ぶことができたのは大きなことであった。今回

の学びは、当然ながら今後の自らの学術研究に活かしていきながらも、日本企業とのアセスメント開発や研修効果の測定などにも活用していきたいと思う。

その他に今日取り組む必要のあることは、二つの契約書を完成させることと、明日に行われるジャン・ディエナム博士とのミーティングに向けて資料をもう一度読み返しておくことである。明日のミーティングは、これから始まる研究インターンの中でどのような仕事に取り組むのかを明確にすることが最大の焦点となる。今回の研究インターンの中で、私は教育科学者の最初のキャリアを歩み出した者として扱われることになっており、主には実証的教育科学の観点からデータ分析を行うことが主なタスクになるだろう。どのような業務範囲になるかは明日のミーティングで明瞭なものになる。今日も非常に充実した一日になるような予感が今からしている。フローニンゲン:2018/1/24(水)
07:19

No.681: Doubling

Since a couple of days ago, I've resumed learning music theory and composition theory by text books. One of the topics that I learned again was the principle of "doubling" in four part writing. I noticed that I often neglected the rule; or I can say that I didn't fully comprehend which note should be doubled. I'll be aware of this principle in the next composition practice.

A small finding can be a gigantic edifice in the future. Groningen, 15:25, Tuesday, 1/23/2018

2047. この瞬間のためにあったこれまでの日々

「ああ、これまでの日々はこの瞬間のためにあったのだ」という確かな感覚に先ほど襲われた。

これまでの日々に取り組んできたことが、ある時今この瞬間のためにあったのだと覚知される瞬間に立ち会ったことはないだろうか。私は人生の節目節目でそのような瞬間に立ち会う。

この現象は不思議なもので、これまでの日々がある瞬間とつながると同時に、その瞬間はまた次の瞬間につながっていく運動を即座に始める。そしてまた新たな大きな瞬間に向かって自己を前に進めていく。

米国での生活を通じて、それらの瞬間に何度も立ち会ってきたことが、今私をオランダに運んできたに違いない。またそもそも私を米国に運んだのも、日本で立ち会ったそうした瞬間によるものだろう。

これから私はまた研究領域を大きく変え、引き続きオンライン学習についての研究をしながらも、芸術と人間発達の研究に取り組んでいく。とりわけ、作曲技術の発達過程と美的経験が深まるプロセスを科学的に研究していくことに取り組む。米国での大学院で発達心理学を学び、フローニンゲン大学で複雑性科学の研究手法や実証的教育科学の研究手法を学んできたことは、その新たな研究のためだったのではないか、という思いに駆られる。

再度米国で芸術と人間発達の研究をするために、私は今オランダにいるのだという確信めいたものが降ってきたのである。日本を離れ、米国に渡ったのもそのためであつたし、米国を離れてオランダに渡ったのもそのためだったのだ。全ては次の新たな瞬間に伸びていたのである。

この体験は、普段は気づかない瞬間の粒子が拡大し、拡張された瞬間の粒子と自己が接触する感覚だと言い換えることができるかもしれない。私の中でこうした体験はもはや劇的なものではないが、それでも畏怖と神妙さを伴う静かな気持ちにさせてくれるのは確かだ。本当の気づきとは、このように静かなのではないだろうか。

劇的な気づきの奥にはまだ深層的な気づきが眠っているのである。オランダで生活を始めて一年半が経とうとしているが、今ようやく自分がここにいる深層的な意味に気づけたように思う。それは次の瞬間に向かっていくために不可欠のものであり、今私がここにいることは必然だったのだ。この瞬間にそこにいることは、次の瞬間に向かうために不可欠であり、なおかつ必然なのだ。フローニンゲン:2018/1/24(水)08:02

No.682: Reification of My Concern toward This Modern World

I want to express my concern about social problems in this modern world as music. My present composition skill is quite low, which inhibits me from accomplishing my purpose. Once I can acquire a certain level of skills, I'll start to reify my thoughts on social issues as music. I already have some themes that I want to address. Groningen, 15:42, Tuesday, 1/23/2018

先ほど大学から戻ってくると、二つの郵便物が届いていた。一つは首を長くして待っていたガブリエル・フォーレの楽譜だった。数日前にフォーレの別の楽譜を受け取っており、今日届いたものを合わせると、フォーレの全てのピアノ曲の楽譜を入手したことになる。数日前に受け取っていた楽譜には、私が好んで聴いている「舟唄」が収録されておらず、一連の舟唄は本日届いた楽譜に掲載されている。

早速楽譜の中身を開け、舟唄のページを開いた。私はフランス芸術に関する造形は深くないが、楽譜の視覚的イメージからフランス的な美がそこに宿っているように思えた。

フォーレの楽譜を全て眺めてみると、どれも視覚的にはシンプルに見える。そこには複雑な構造的性はそれほど見られず、それでいて—あるいはそれだからこそ—何とも言えない美の香りがする。フォーレが残したノクターンを見てみても、ショパンが残したノクターンに比べて、やはり視覚的にシンプルだという印象を与える。ただし、そうした視覚的なシンプルさの中にもどこかフランス的な香りが漂っているように思えて仕方ない。

現在は、バッハやショパンなどに範を求めることが多いが、近日中にフォーレの舟唄の一曲を参考に何か曲を作りたいと思う。フォーレの曲に範を求め、少しずつ曲を作っていくことに合わせて、以前に届いたフォーレの手紙も合わせて読み進めたい。

本日届いたもう一冊の書籍は、アルフレッド・マンが執筆したフーガの技法についての解説書“*The Study of Fugue* (1958)”である。まだ中身を詳細に確認していないが、ざっと中身を眺めると、ルネサンス時代のフーガの技法から始まり、様々な具体例を用いながらバロック時代のフーガの理論を紹介している。他の作曲理論書と同様に、この書籍にも具体例が紹介されているが、他の書籍に比べて、理論的な説明が豊富にあるという印象を受けた。フーガに関してはもしかすると、この一冊を繰り返し学習することで十分なのではないかと思われるほどに説明が充実している。

実際に本書を本格的に読み込んでいくのはもう少し後のことになるだろうが、一読目はできるだけ早い時期に行っておきたいと思う。こうした作曲理論に関する書籍を読みながら、牛歩の歩みであるが、作曲に関する技術の種類が少しずつ拡張し、一つ一つの技術がゆっくりと深まっていく姿を

見ると、何とも言えない充実感を覚える。実際に作曲実践をしている最中には、そのような技術的進歩の充実さというのは念頭になく、それよりも曲を創造することの喜びや充実感が圧倒的に勝る。技術的な進歩に伴う充実感は一時的に訪れるものなのだと思う。

今日もこれから少しばかり作曲実践を行いたい。フローニンゲン:2018/1/24(水)16:19

No.683: Massive Amount of One-Minute Music

Last night, I suddenly thought that I would compose one-minute music everyday. If I really do it, the infinite number of small piece of music will be one massive work in the end of my life. Just one minute is sufficient. I think three minutes are too long, thus I'll set the maximum length as three minutes. I'll compose around one-minute music for the time being. Groningen, 08:09, Wednesday, 1/24/2018

2049. メタアナリシスと成人発達研究

今日は昼食後に、「応用研究手法」のコースの最後のクラスがあった。今日のクラスでは、「システムティックレビューの執筆方法」でも取り上げられたメタアナリシスの意義について再度確認することからクラスが始まった。

私たちはニュースにせよ新聞にせよ、ある事象に潜む因果関係に関する説明を見聞きすることが頻繁にあると思う。例えば、「経済不況が起こっている原因は～である」という言葉であったり、「～は血糖値を下げることに効果的な食べ物である」等々である。因果関係を説明するこのような言葉を見聞きした時に私たちが気をつけなければならないのは、当然ながらその因果関係は実証的に明らかになっているのか否かだと思う。

しかし、仮に実証的にある因果関係が説明されたからと言って、私たちはすぐさまその因果関係の正しさを鵜呑みにすることはできない。なぜなら、研究デザインの質の問題であったり、研究手法に潜む内在的な限界など、その因果関係が本当に正しいかどうかは一つの研究結果をもってしてすぐさま立証できるものではないからである。

往々にして社会科学の研究、特に私がいる心理学や教育学の実証研究は局所的なものである場合がほとんどであり、研究対象者や介入手法の個別性がかかなり高いことが多い。そうした事情もあり、一つの局所的な研究成果から安易な一般化をすることには危険性が伴う。端的に述べると、私たちはよく一つの研究成果をもってして、ある介入手法の効果を鵜呑みにしてしまいがちだが、実際にはそれほど単純ではないのである。

これは科学者ではない一般の人たちのみが陥りやすいことではなく、科学者でも頻繁に陥ることである。例えば、ある論文を執筆する際に、「この論文では、Aという教育手法は統計的に有意な効果はないと述べており、またあの論文でもその研究手法は統計的に有意な効果は見られなかったと述べている。さらに別の論文を読んでも、やはりその教育手法には有意な効果は得られなかった」というような形で、ある教育手法の効果に関する物語を構成するような論文を見かける。

しかし、そうした論文の執筆者も結局のところは、上述のようにある個別個別の研究成果にのみ着目し、より包括的な視点でその教育手法について精査していないことが伺える。そこで重要になってくるのは、個別個別の研究成果を単に列挙することではなく、体系的なアプローチでその教育手法に関する研究を網羅的に調査していくことである。この点がまさにメタアナリシスの貢献領域となる。

メタアナリシスを用いることによって、例えばある教育手法に関する研究を網羅的に調査し、数百や千にも及ぶ研究の成果に対して統計処理を行い、一つの包括的な結論を導き出していく。このプロセスを経ることによって、単に偶然見つかった個別的な研究をいくつか眺めて結論を出すよりも、より信頼性と妥当性の高い結論を導き出すことが可能になる。

残念ながら、私の専門分野である成人発達の領域において、とりわけ構造的な発達に関する介入手法の効果測定については、そもそも個別的な実証研究が少なく、それが背景にあるがゆえに、メタアナリシスを行っている論文は皆無に等しいように思う。

構造的な発達を長期間にわたって調査することが難しいのは承知であり、構造的な発達を支援する手法が希少なことも知っているが、当該研究分野のさらなる発展と成人発達の支援を行う実務領

域の発展を考えた場合に、そうした研究を積み重ねていくことは必要不可欠だと思われる。フローニンゲン:2018/1/24(水)16:43

No.684: Verbosity and Succinctness

When I'm writing in Japanese, it tends to be verbose. On the other hand, my English writing is inclined to be concise. The difference is intriguing. Of course, one cogent reason might be the fact that my native language is not English but Japanese. Yet, I think there are many other reasons underlying this phenomenon.

Anyway, I'll continue to keep a concise journal in English. Both verbosity and succinctness are the nature of my writings. Groningen, 08:32, Wednesday, 1/24/2018

2050. 二つの夢

今朝は六時過ぎに起床し、六時半あたりから一日の活動を開始させた。昨日は夕方から雨が降り始めていたが、どうやら今は雨が止んでいるようだ。

天気予報によると、今日は晴れであるらしい。ちょうど午後から、自宅から少し離れたザーニクキャンパスに行く用事があるため、晴れであることは幸いだ。

昨夜の夢の印象が強く、起床してからもその夢を反芻している自分がいた。今は少しずつ記憶が薄れ始めているが、覚えている範囲のことを書き留めておきたい。

夢の中で私は、ある大きな生鮮食品スーパーで働いていた。そのスーパーはかつて見たこともないほどに巨大であり、フロア中に巨大な棚が何段にも積み重なっている。一つ一つの棚には食料品が入っており、積み重なっている棚はおそらく10mほどの高さになるだろう。私は食料品の質をチェックする仕事に従事しており、巨大な棚をあたかもロッククライミングするかのようによじ登り、一つ一つの棚を開けて中の食料品を確認していた。

棚によじ登っていると、右斜め上に同僚が同じように食料品のチェックをしている姿を見かけた。私は同僚に話しかけ、仕事の捗りぐらいをお互いに確認した。するとその同僚は、今開けている棚の

中から何やら美味しそうな食べ物を取り出し、それを食べ始めた。同僚が私にも勧めるため、彼がいる棚のところまでよじ登って行き、その食べ物を食べた。確かにとても美味しい。名前のよくわからない食べ物なのだが、味は確かだ。

そこで私は、自分がさっきいた棚にある食べ物の味も確認してみよう、と同僚に話を持ちかけた。同僚もかなり乗り気であり、私たちはその場から少し棚を降りていき、私が元いた棚に戻ってきた。そこで私は棚を開け、また名前のわからない食べ物を見つけ、それを同僚と二人で食べ始めた。やはりその食べ物の味もいい。

二人は満足げな表情で、名前のわからない食べ物を食べ続けた。ふと視線を下にやると、今自分がいる場所が極めて高い場所にあるのだと改めて知る。眼下には客もいなかったため、私たちは相変わらずその食べ物を食べ続けていた。すると突然気づいたのだが、私たちはここで働いている者ではなく、客そのものに他ならないということだった。

巨大な棚をよじ登り、その棚から好きな食べ物を好きなだけ食べる夢。自分がその店の従業員ではなく、お客だったことに気づいたところで夢の場面が変わった。

次の場面では、私はサバンナ気候の土地の上を歩いていた。ジャングルのように木々が生い茂っているわけではなく、背の低い木が何本か所々に生息しており、地面にはこれまた背の低い草が生えている。

しばらく歩いていると、一本の木が枝と葉っぱを道の方にだらりと垂らしている姿が見えた。その木に近づいていくと、木を通過しようとした左側から蜂の飛ぶ音が聞こえてきた。大量の蜂ではなく、おそらく一匹の蜂の飛ぶ音だったと思う。私はその蜂に刺されないようにその場をそそくさと後にし、すぐさまその木から離れた。

木を離れて再びサバンナの道を歩いていると、蜂の音が聞こえてきた耳の方から、「今年のイタリアサッカーはどうだろう？」という声が聞こえてきた。声が聞こえてきた方向を見ると、そこには誰もいない。しかし、その声は私に向かって話しかけているようだった。

最初は若干薄気味悪く思えたが、その声は確かに私に話しかけてきていることが次第にわかってきた。どうやら、イタリアにいる見知らぬ人が遠方から今サバンナにいる私に向かって話しかけているらしいのだ。もう随分とサッカーを見なくなっているのだが、そのイタリア在住の人物とお互いの姿が全く見えないまま今年のイタリアサッカーについて対話を行っていた。フローニンゲン:2018/1/25 (木)07:10

No.685: Beyond the Vicissitudes of Our Life

Is our life colored by prosperity and decline? I cannot help but think that there is another color that goes beyond the vicissitudes of our life. Our life is painted by the color that transcends the dichotomy between ups and downs. Groningen, 09:11, Wednesday, 1/24/2018

2051. 今日の活動

今日は午前中に、リクルートマネジメントソリューションズさんの「オトマナプロジェクト」という大人の学び方に関するプロジェクトの一環として、早稲田大学ラグビー部元監督の中竹竜二さんと対談をさせて頂くことになっている。対談の焦点は、「大人はいかに若者から学びを得ることができるのか?」というところにあり、そこから成人発達に関する話を含めて様々な話題が取り上げられる。

こうした対談やインタビューの機会というのはいつも非常に有り難く、対談やインタビューを行わせて頂くたびに、いつも私の方にも大きな気づきや発見がもたらされる。今からおよそ一時間半後に迫った中竹さんとの対談が今からとても楽しみだ。

今朝起床した瞬間の不思議な感覚をうまく言葉にすることができない。今朝、私はこれまで感じたことのないような感覚に包まれて目覚めた。内側の感覚の変容。あるいは、感覚を創出し、感覚を容する器そのものの変容が起こったのであろうか。

何かこれまで感じたことのない感覚が自分の内側に流れ込んでいた。この世界がまた新たに始まったのと同時に、この世界の何かが完全に終わりを告げたのだということを知らしめるような感覚。それは重くも軽くもなく、ただ感覚として歴然とそこにあるようなものであった。色を持たない感覚。何

か特定の感情を引き起こすことのない半透明な感覚と表現できるだろうか。そのような感覚が起床直後の自分を包んでいた。

今日は午後から、普段足を運ぶキャンパスとは異なるザーニクキャンパスを訪れ、研究インターンのスーパーバイザーであるジャン・ディエナム博士と打ち合わせをすることになっている。今回、教育科学者として外部コンサルタントもしくはアドバイザーのような立ち位置で、フローニンゲン大学が提供しているMOOCのコンテンツを分析することになっている。今日の打ち合わせでは、具体的な業務範囲を明確にし、相手方の期待とこちら側の期待のすり合わせを行い、契約書を交わすことになっている。

今回のインターンに関して、フローニンゲン大学のMOOCを統括する部署に雇用される形態をとることも可能であり、その際は週に二日の仕事に対して給料が支払われる。この点についてはディエナム教授と話し合う必要があるが、私が今回のインターンにもたせている意義は、自分の研究で取り扱うデータを収集し、それをインターン中に分析し、自分の研究を進めていくことにある。

もちろん、今回の研究を通じてフローニンゲン大学のMOOCに対して何か提言できるような成果が出ることを期待しており、その成果を分析レポートやコンサルテーションレポートとして提出しようと思っている。

いずれにせよ、私が今回のインターンで行おうとしている事柄は自分の研究の域を出ないため、仮に自分の研究のみに専念させてもらえるなら賃金など一切必要なく、一方で仮に大学側から様々な分析依頼やコンサルテーション依頼を引き受けるのであれば賃金を伴う契約形態にしたいと思う。特にそのあたりを今日の打ち合わせで明確にすることができれば、再来週からのインターンをうまく始めることができるだろう。フローニンゲン:2018/1/25(木)07:41

No.686: Spirited Rhythms

Don't you sometimes want to run all of a sudden or want to move your body unexpectedly? We seem to have inherently spirited rhythms within us. Groningen, 08:55, Thursday, 1/25/2018

先ほど、リクルートマネジメントソリューションズさんの「オトマナプロジェクト」という大人の学び方に関するプロジェクトの一環として、早稲田大学ラグビー部の元監督中竹竜二さんとの対談をさせていただいた。一時間半に及ぶ対談であったが、その時間はあっという間に過ぎていった。私自身、人間発達を研究する中で、スポーツの世界に対する関心はいつも非常に強い。

今、企業人の発達に関する研究と協同を進めていくことに並行して、学術的な研究の焦点は芸術と人間発達に向かっていることを以前の記事で書き留めた。一方で、私は依然としてスポーツと人間発達の研究や協同プロジェクトにも関与したいと思っている。

本日、中竹さんからの示唆に溢れる数多くのお話を聞き、スポーツ界との関わりを持つことができたらと幸いであるという思いがより一層強くなる。今日の対談の中で中竹さんが共有してくださったお話には大変感銘を受けるものが多く、それらについては私自身の中でもう一度反芻し直す必要があるだろう。

対談後、しばらく私は書斎の窓の外をぼんやりと眺めていた。相変わらず鬱蒼とした空が広がっているのだが、どうしたものだろうか。そうした鬱蒼とした空を眺めながら、また一つこれまでの自分には気づかなかった事柄が突如として顔を覗かせた。

何かを学ぼうとする意思、さらには何かを深めていこうとする意思の向こう側にある意思と、その意思のさらに先にあるもはや意思とは言えないような力の存在に気づいたのである。これはもしかすると、以前から自分が考えていたことの確認だと言えるかもしれない。何かを学ぼうとする意思、そして何かを深めていこうとする意思の向こう側にある意思とは、一人の人間として与えられた固有の生を深めようとする内在的な意思に他ならない。

私は何かを学びたいという思いや何かを探究したいという思いが常にあるが、それらの思いが自分を突き動かしているわけではないことをいつからか知っていた。ではそれが何なのかについては、随分と長い間悶々と考えさせられるような日々を過ごしていた。

欧州での生活を始めてある日ふと、それが自らの有限な生を極限まで深めていこうとする本能的な意思だということに気づいたのである。それはまさに内在的なものであって、私たちが意識するのではないとにかかわらず四六時中私たちの内側で働き続けている。もしかすると、それはもはや生命力と言えるようなものだと言い換えることができるかもしれない。

自分を日々突き動かしているのは、意識的な自己が感じるような学びに伴う欲求のようなものではなく、それすらも超えた生命力のようなものなのではないかと思う。そしてこうした生命力の根源、あるいはそれを超越したものとして、極限まで深められた個の生から人間存在に共通の普遍的な生に向かっていく力が存在しているように思えて仕方ない。つまり、日々の私を突き動かしているのは、一つの個としての生命を深めようとする内在的な力であり、その力を超えて、人間存在の普遍的な生に向かっていく力、あるいは普遍的な生命を深めようとする内在的な力だと言えるように思える。もしかするとこうした力は、発達心理学者のスザンヌ・クックグロイターが提唱する「univesal」な段階に固有の特性なのかもしれない。

今日は中竹さんとの貴重な対談があったということを書き留めておかなければならない。今日が確かに今日存在していたのだと書き留めておかなければならない。でなければ、本当に私が今日この世界にいたということがわからなくなってしまうだろう。

自己の存在が深まるというのは、自己の消滅の危機と隣り合わせにあるような気がしている。自己の存在がますます透明になりつつある日々の中で、決して消滅することのない自己の永遠性を見出す必要があるだろう。自己が永遠に近づくことと自己が消滅することの間を今の私は歩いているような気がする。フローニンゲン:2018/1/25(木)11:30

No.687: Meeting for an Internship on MOOCs

I had a meeting with my future supervisors for a research internship on MOOCs. We clarified my role and responsibility as an intern. By virtue of today's meeting, I convince myself that I can make a good start for this internship. I look forward to the first day to work. Groningen, 17:19, Thursday, 1/25/2018

先ほど書き留めた日記の中で、個の生命を深めようとする内在的な力について言及していたように思う。それはどこか、昨日の私と今日の私のアイデンティティを繋ぐ目には見えない力のように内在的なものだ。

よくよく考えてみると、昨日の私と今日の私のアイデンティティが連続性を持っているということは驚くに値することだと思うのだ。しかし、いつからか私は、こうした連続性の向こう側を見ようとするような試みに着手し始めているように思う。その背景には、昨日の私と今日の私を繋ごうとする保存的な力によって失われてしまった自己の側面があるのではないか、と思うようになったからだ。

自己を保存しようとすることによって、何か失われてしまったものがあるのではないだろうか？そのような問いを出発点とし、その失われたものが何なのかを発見しようとする試みにいつからか着手し始めていた。

いつも目覚めた時、「今日も自分が始まった」という言葉が口から自然と漏れそうになる。もう少し丁寧な言葉で言えば、「今日も昨日と同じかつ新たな自分が始まった」という言葉が起床時の頭に浮かぶ。

連続的でありながらも、何か昨日と違う自己の側面が小さく芽生えているという確かな感覚。それを毎朝感じるのだ。それは、自己のアイデンティティを保存しようとする内在的な力の現れであるのと同様に、保存しながら深めようとする内在的な力が私たちに備わっていることの表れかもしれない。それらの力の存在を毎朝直視させられるのが、私の一日の始まりの特徴だ。

無風。有音。空を飛ぶ鳥。今の私を取り巻く外側の世界を描写するとそのようになるだろうか。

体験を経験に昇華させ、経験から自らの言葉を見出した人にしか生み出せない言葉があるということを、本日の中竹さんとの対談から改めて感じたように思う。新たな気づきや発見というのは、本当に純粋に新しいものなのだろうか。どうも私には、新たな気づきや発見というのは、実はすでに自己の深層部分にあるのではないかという思いがしている。気づきや発見というものが仮に見出されるものであるならば、それはどこに見出すことができるだろうか。

仮に外発的な刺激があったとしても、気づきや発見が生まれる場所は自分の内側だろう。そのようなことを考えてみると、自分の気づきや発見が自己の内側から芽生える前提条件に、実はそもそもそうした気づきや発見は自己の深層部分に最初からあったと考えることはできないだろうか。

確かに、気づきや発見は見出していくものなのだが、同時にそれはどこか、自分の本来持っているものを思い出すこと、あるいは回帰していくことに近い営みなのではないだろうか。

有風。無音。鳥のいない空。世界がまた姿を変えた。

変化の最中であって、変わらないもの。変化を生み出す内在的な力と変化を超えたところにある不変的なものは、常にこの瞬間に存在しているのだということを、今日の前に広がる世界が告げている。フローニンゲン:2018/1/25(木)11:30

No.688: Refreshing My Memories

Since two days ago, I've read again a fundamental book about music composition. This second reading refreshes my memories about various techniques of music composition. In particular, I noticed that I lost my memories about diverse ways to develop a melody.

Since I could recall the various types of techniques, I'll immediately apply a couple of them to music that I'll create tonight. Practice is foremost important to build a robust foundation of my composition skills. Groningen, 17:57, Thursday, 1/25/2018

2054. フローニンゲン大学でのMOOCに関する研究インターン

今日は夕方に、MOOCに関する研究インターンシップのミーティングがあった。インターンシップのスーパーバイザーは、昨年にもミーティングをさせていただいたジャン・ディエナム博士とエスター・ボウマ博士に改めてお願いすることにした。

今日のミーティングは普段足を運ばないザーニクキャンパスで行われたため、ミーティングの行われる建物内で迷ってしまい、ミーティング開始時間に少しばかり遅れることになってしまった。ミーティ

ングルームに到着すると、ディエナム博士が笑いながら「ここはそんなに時間に厳密ではない」と述べてくださった。

建物内には時間よりも早く到着したのだが、いかんせんミーティングルームが見つからず、ディエナム博士に「迷ってしまったため少しばかり遅れる」という旨の連絡をすると、「レスキューチームを送ろうか？(笑)」というメッセージがすぐさま帰ってきた。

何とか無事に部屋に到着し、ディエナム博士とはおよそ一年振りの顔合わせだったために、最初に少しばかり雑談をした。数分後、ボウマ博士が部屋に入ってきて、そこでも久しぶりの再会をお互いに喜んだ。しかしどうやら、ボウマ博士はレスキューチームの一人としてディエナム博士に派遣されたく、建物の一階に行き、私を探してくれていたようだった。そんな形で今日のミーティングが始まった。

お互いの近況報告を簡単に済ませた後に、早速本題のインターンシップについて話を始めた。今回のインターンシップは、私が現在関心を寄せているMOOC(大規模公開オンライン講座)に関するものである。

当初私は自分の研究の一部をこのインターンシップの期間に行いたいと思っており、データの収集から分析までを行えば理想的だと考えていた。しかし、今日のミーティングを通じて、インターンとしてできることの可能性がより広いことがわかった。私の研究をあえてインターンとしてデスクを借りてここで行う必要はなく、それよりもむしろフローニンゲン大学のMOOCチームと幅広い業務を協働することの方が学びが深いであろうし、今後の研究にも有益だろうと思った。

実際にフローニンゲン大学のMOOCのディレクターを務めるディエナム博士から、現在進行している複数のプロジェクトの概要を聞いた時、様々な形で私が関与できることがわかった。プロジェクトの中には、まだコンテンツの企画フェーズのものもあり、企画段階のMOOCに関与できる機会は非常に貴重だと思う。

ディエナム博士とボウマ博士と私の関心やニーズは合致しており、インターンとしてできることの範囲は私が想像していたよりもずっと広いことがわかった。二人と意見交換をし、自分の研究をインターンシップの期間に行なうのではなく、まずはMOOCチームのリーダーと協働する中で様々な役割を

担っていくことにした。その過程の中で、MOOCについて私がこれまで知らなかった点が多く明らかになってくだろうし、今後の研究の幅も広がっていくだろうと思われる。

MOOCチームのリーダーを務める方とは、昨年の秋頃に行われたMOOCに関するワークショップの時に一度顔を合わせており、彼と協働することが実現されつつあるというのはどこか感慨深いものがある。

今日のミーティングを通じて、インターンシップに対する期待感が随分と増したように思う。ミーティングを終え、ディエナム博士のオフィスを後にしようと思ったところ、ふと部屋のホワイトボードに目が止まった。そこには、昨年私がミーティングをした時に書き残した説明文や図がまだ残っていた。

ディエナム博士:「ああ、それはヨウヘイが昨年書き残したものだよ。消さずに残してある」

ディエナム博士はその後に、「これで私がそのホワイトボードを滅多に使わないことがわかっただろう(笑)」と冗談交じりに発言を付け加えた。一年前に書き残した自分の説明文や図を見ながら、今日このようにして再びディエナム博士とボウマ博士と話をしていることがとても尊く、感慨深いものと思えた。

2月からこのオフィスでインターンとして働くことが非常に楽しみだ。フローニンゲン:2018/1/25(木)
18:25

No.689: A Cryptic March

Have you ever incidentally noticed that you are engaging in the act of a cryptic march in your life? Our life is full of mysteries. Both unpacking each mystery and living with a mysterious march might be the essence of our life. Groningen, 15:15, Friday, 1/26/2018

2055. ボンでの出来事

旧西ドイツの首都であるボンの街にイスラム諸国から難民がなだれ込んできたようだ。そのような知らせの中、私はボンのある教会にいた。その教会には時を告げる時計台があり、難民たちがその時計台に向かって祈りを捧げている光景を目にした。

その時計台に向かっていくと、イスラム系難民の老婆が私に声をかけてきた。言葉の意味を完全に理解したわけではないが、何やらこの時計台の有り難さについて説明しているようだった。その説明を聞いて、私は時計台を改めて見上げた。すると、その老婆が、「この時計台の時計の大きさは驚くほどだ」と述べたので、実際にその時計がよく見えるところまで進んで行くことにした。

実際のところ、この時計台は、高さが全く高くなく、ほんの数メートルの大きさしかない。そのため、その時計台の下まで行けば、その時計の姿が近くからよく見える。実際にその時計に近づいてみると、老婆が述べたほどの大きさでもないと思えた。

相変わらず時計台の下には、この時計に向かって祈りを捧げている難民が数多くいる。どうやらボンの街では難民の受け入れに関して暴動があったらしい。今でもまだ暴動の余波が残っている。時計台をしばらく眺めていると、突然何かが崩れ去る轟音が聞こえた。

その音の方に目をやると、ある大きな建物が崩れ去り、崩れた瓦礫の中から巨大なビルが立ち現れた。それは商業用のビルであり、ショッピングとビジネスの双方に利用できるような巨大な近代的なビルであった。

奇抜なデザインを持ったこの巨大なビルが出現した時、その場にいた難民を含め、ボンの街にいる人たちも仰天しているようだった。私はこの奇抜なデザインを持った巨大なビルを見た瞬間、これは難民の受け入れに関して暴動が起こることを見越して、その問題から市民の目を背けるために意図的に建てられたものだと思えた。そのようなことを考えながら、時計台の下から私はこの巨大なビルをぼんやりと眺めていた。

それは夢的一幕であり、そこからまた別の夢に移行していった。次の夢の中では、私は数名の友人たちと共に絵画の品定めを行っていた。

目の前に絵画のカタログがあり、それは物理的なものではなく、デジタルだった。私たちは部屋の中において、部屋のフロアに浮かび上がるデジタルカタログを眺めながら、一つ一つの絵の良し悪しについて意見を述べ合っていた。ある絵画作品が現れた時、一人の友人が声を上げた。

友人A:「あっ、これはXXさんという三歳の天才画家が描いたものだ。それにしてもこの絵画は「降霊系」のものだね」

友人B:「そうだね、これは本当にあちらの世界から何かを降ろして来た形で描かれた作品だ。おそらくXXさんという画家は、向こうの世界のものをこちらに降ろしてくる媒介的能力を持っているのだと思う」

二人の友人がそのようなやり取りをするのを聞きながら、確かにこの絵が「降霊系」のものであるということに私も疑いはなかった。しかし、隣にいた友人がまた別の観点から発言をした。

友人C:「ただこの絵画はあまりにも純朴過ぎやしないか？あちらの世界のものを純粹に表現しているのはわかるが、この作品の持つ力というのが少し弱い気がする」

その友人の発言を聞き、私は改めてこの絵画作品をじっと見つめた。絵画としての第一印象は、まさかこの作品を三歳の子供が描いたとは思えないほどの立派なものであり、その色使いなども実に見事だ。そこで描かれている木々と、木々に宿っている光り輝く生命が実に巧みに表現されている。ただし、その友人が述べるように、確かに少しばかり純朴にこの世界を表現し過ぎている感も否めなかった。

この作品が最も物議を醸したものであり、この作品については、プロの画家である友人の兄にも意見をもらうことにして、私たちはまた様々な作品を鑑賞することを続けた。フローニンゲン:2018/1/26 (金)07:09

No.690: Memo-Creator

Each entry of my diary and each work of my music is kind of a memo. In that sense, I'm just a "memo-creator (or memo-taker)." I suppose that it is acceptable or essential in this world for someone to focus on keeping memos. Editing and examining those memos can be or should be done by someone else.

I'll continue to devote myself to just keeping memos everyday. Leaving a tons of memos is my role and responsibility in my life; it is my lifework. Groningen, 15:44, Friday, 1/26/2018

春の予感が確かにあった。昨日、研究インターンに関して、ジャン・ディエナム博士とエスター・ボウマ博士とミーティングをし終えた後、ザーニクキャンパスから河川敷のサイクリングロードを歩いている時に春の予感があった。

「もう直ぐ春が来る」という確かな実感は、日が伸び始めていることに気づいたことからもたらされたと言えなくはない。しかしそれ以上に、サイクリングロードを歩いている私の内側の中で、目には見えない形で季節が動いて行っているエネルギーのようなものを感じ、それが間違いなく春の様相を呈したのになり始めていることに気づいたのである。

その時の時刻は四時半に近づきつつあったが、辺りはまだ闇に包まれておらず、だいぶ日が伸びているという印象を私に与えた。ザーニクキャンパスから自宅に向かって歩いている最中、春が到来する喜びのようなものが私の内側からこみ上げていたのである。

自宅に戻ってきてからは、作曲理論の学習を続けた。これまでに一読した書籍を改めて読み返してみると、いろんなことを忘れていたことに気づかされ、同時に様々な新たな気づきをもたらされた。

忘れていたことの再想起と新たな発見をもたらしたのは、おそらくそれまでの期間に私が作曲実践を愚直に継続させていたことが大きいだろう。継続的な実践に従事する中で、作曲上の様々な問題にぶつかり、問題意識が随分と醸成されていたことが、再読の意義をさらに高めているように思えて仕方なかった。

実践というのはもしかすると、確かに一つ一つの問題を解決していくプロセスに他ならないが、逆に新たな問題を次々と自分の内側に蓄積していくためにあるのかもしれない。つまり、問題を解決することが実践の意義ではなく、新たな問題を獲得していくことが実践の意義なのではないだろうか。

これをさらに押し広げて考えてみると、人間としての発達にせよ、何らかの技術的な発達にせよ、発達というのは確かに既存の問題を解決していくプロセスに他ならないが、一方で、新たな問題を絶えず自己の内側に包摂していくプロセスだと言えるのではないだろうか。

ジョナサン・ピーターズという米国の作曲家が執筆した、作曲理論に関する三冊の基本書と音楽理論に関する書籍の再読を進めている。自分でも驚くが、音楽について一切何の知識もなかった私が数ヶ月前にこれらの書籍を読んだ時よりも、今は格段に理解が進んでおり、初読のときに意味が掴めなかった数多くの箇所の意味が紐解かれるように理解できるようになっている。こうしたことがもたらされたのも地道に作曲実践を進めていたからであろうし、作曲理論の他の専門書を読み進めてきたことが大きな要因だろう。現在読み返している書籍は、非常に説明がわかりやすいため、これらの書籍は今後も折を見て三読、四読と繰り返し読み込んでいきたい。

自分の記憶から抜け落ちていた技術を活用しながらゼロから自分で曲を作るという実践と、他の作曲家の曲に範を求めながら曲を作るという実践をこれからも続けていく。昨夜はとりわけ前者に関する実践を行っていた。やはりまっさらな状態から、他の作曲家の楽譜を一切参照することなしに曲を作ることにはまだまだ困難さが伴う。メロディーに関しては徐々に独力で作れるようになってきているが、やはりハーモニーの創出に関してつまづくことが多い。生み出されたメロディーに対して、どのような伴奏を作っていくかは今後も一つの重要な課題となるだろう。フローニンゲン:2018/1/26(金)
07:33

No.691: Memo-Taking as a Mission

Again, I'm a "memo-taker" for keeping my thoughts and senses on the theme of human existence. It's a mission in my life. Continuously writing and composing are concrete activities to fulfill the mission. I'll fully engage in such activities as a memo-taker for investigating the depth of human existence. Groningen, 07:05, Saturday, 1/27/2018

2057. 環境適応と環境包摂

今日は早朝から辺り一面が霧に包まれていた。その霧の深さはなかなかのものであり、まるで雪が吹雪いているかのように視界が一面真っ白の世界であった。実際に、道行く車もヘッドライトを灯しながら慎重に進んでいた。そうした外の世界を眺めながら、今日も午前中にある日本企業との協働プロジェクトに取り組んでいた。

昼食前に仕事がひと段落し、そこから日本へ契約書類を送るために近くの郵便局に立ち寄った。郵便局に行くことを兼ねて、ランニングをしようと思い、いつもとは異なるコースを走りながら郵便局に向かった。

無事に契約書類を日本へ送った後、行きつけのインドネシア料理店に向けて再び走り出した。走っている時には今朝からの霧は随分と晴れていたが、太陽の姿を拝むことはできなかった。

先週あたりには二日連続で太陽の光を浴びることのできる日があったが、それは束の間の出来事であり、再び晴れ間の全くない日々に逆戻りしている。しかし、ここで今朝私は不思議なことに気づいた。初めてオランダで生活を始めた去年は、こうした外部環境の影響から精神的な過酷さを経験していたが、二年目の生活においてはそのような経験をすることはほとんどないということである。

この点については以前の日記で触れていたかもしれない。これを単純に「環境適応」と述べることは可能であるが、私はもう少し深い意味があるように思えて仕方がない。私は単にオランダの土地に適応したのみならず、その時から日々の生活の中に確かな充実感を汲み取ることができ始めているという、単なる環境適応を超えた現象を見出すことができる。

晴れの日が全くないこのような時期において、なぜ私の心はこれほどまでに晴れやかなのだろうか、と自問する。環境が自己を包摂するのではなく、自己が環境を超越し、環境を包摂するようになっている、と言えわかりやすいだろうか。おそらく、環境適応という形で環境の中に自己が定位されているのではなく、環境超越による環境包摂が起こることによって、自己の中に環境が定位されているという内的状態を見つけることができる。おそらくこれをもってして、私はもはやいかに気温が低かろうが、太陽を見る日が減多になかろうが関係なしに、生きていることの確かな実感と内から滲み出す充実感を持って日々の生活を送ることができているのだろう。

昼食中にもう一つ新たな気づきを得た。それは、今述べたような「充実感」であったり、「幸福感」という言葉を私が用いるようになったのは、欧州での生活を始めてからしばらく経ってからのことであったということだ。

私は新たな土地で生活を営むことを続けていく中で、徐々に自らの人生における充実感と幸福感を見い出していったのだと思う。ここに明確な因果関係を規定することは難しいが、やはりこうした新

たな環境で再度自らの精神生活を構築し直すという試みがあったがゆえに、私は徐々に自分の人生における充実感や幸福感とは一体何なのかを見い出していったのだと思う。そして、ひとたび「充実感」や「幸福感」という言葉を用いて意味を生成し始めると、それらの言葉の持つ意味もまた今後変容を見せるに違いない。それらの言葉の持つ新たな意味は、おそらく次の生活拠点で見出されることになるだろう。フローニンゲン:2018/1/26(金)13:42

No.692: Pathos Into Time

Have you ever experienced the sense of pathos dissolving into time? Whenever I have such a feeling in my daily life, I suppose that the pathos melts into an enormous flow of time. Groningen, 10:05, Saturday, 1/27/2018

2058. グルジアへの訪問

今年のフローニンゲン大学の教育科学学科には、総勢で60名ほどの修士課程の学生がいる。そのほとんどは教員経験のある者で占められており、私を除いて他の全ての学生はオランダ人である。

フローニンゲン大学は留学生が多く、多様性が確保されていることで有名であり、確かに発達心理学に在籍していた昨年は、欧州の国々を中心にオランダ人以外の学生が多かった。しかし今年は打って変わって、オランダ人の中に一人日本人の私がいるような状況である。

教育学科にはいくつもの専攻があり、教員経験のある者の多くは「教授法(教育方法)」を専門とするより実践的なプログラムに在籍していたり、教員経験のある者の中でも、特に教育に関する科学的な研究に関心のある者はより学術的な側面を強調したプログラムに在籍している。

私が在籍しているのは、「実証的教育学」と呼ばれるプログラムで、これは教育学の分野において比較的最近になって確立されたものであり、実際にフローニンゲン大学でもここ数年の間に立ち上げられた新しいプログラムである。

今、「私が在籍している」と表現したが、実際には「私しか在籍していない」と言った方が正しい。自分を棚にあげるつもりは全くないが、以前言及したように、プログラム長のマイラ・マスカレノ教授とプログラム開始前に改めてミーティングをした時に、私以外の募集者は全員不合格だったことを知

らされた。実際にはもう一人だけ米国人が合格しており、その人物は今年の二月からプログラムに参加するかもしれないとのことだった。

今回の実証的教育学のプログラムではないが、私が昨年に修士号を取得したプログラムに関しては、私は過去に二度ほど不合格通知を受け取っている。不合格理由は明確であり、フローニンゲン大学で課せられる科学的な研究トレーニングについていくための最低限の統計的素養がなかったからである。最低限の素養と言っても相応なハードルがあり、私は米国のジョンホプキンス大学が提供するオンラインの統計コースを履修し、そこで単位を取得したり、英国のケンブリッジ大学を訪れ、統計学とRプログラミングに関するデータ分析のワークショップに参加したりしていた。

そうした準備を経て、今私はフローニンゲン大学で研究を続けることができている。そんな中、現在ラーナという友人が交換留学でグルジアの大学からこちらに来ている。ラーナも形式上、実証的教育学のプログラムに在籍しており、彼女がいる間はプログラムには二人の学生が在籍していることになる。ラーナとはこれまでいくつかのクラスで一緒になっており、時に今学期はラーナと私しか受講していないコースが二つあった——それらの二つが今学期私が履修している全てのコースなのだが。

先日、「応用研究手法」のクラスを終えた後、「システムティックレビューの執筆方法」のコースの最終課題について私に質問があるとのことなので、教育棟の一階で少しばかりラーナと話をしていた。よくよく考えてみると、ラーナは今月末にグルジアに帰るため、今日は二人が会話をする最後の日だった。

彼女からの全ての質問に答えた後、「欧州にいる間にグルジアに来ることがあったらぜひ案内するわ。グルジアはお勧めの場所よ」と声をかけてくれた。

グルジアはEUに加盟していながらも、物価は極めて安く、それでいてオランダよりも気候がいいらしい。食べ物に関しても、グルジアはトルコに近かったり、インドなどのアジアの国にも比較的近く、様々な国の民族料理がグルジアに流入し、グルジア料理はとても美味しいらしい。

ラーナと別れ、自宅に戻ってメールを確認すると、グリジアのお勧めの訪問場所のリストがラーナから届いていた。さらにはそれらの場所の写真までもが添付されており、それらを見ると、グルジアという国の持つ魅力、特に自然の美しさは大変素晴らしいと思った。

ラーナから送ってもらった地名を早速グーグルマップ上で調べ、一つ一つの場所を記録しておいた。仮にこの秋に欧州を離れることになったら、その前にぜひグルジアを訪れたいと思う。四月にポーランドとハンガリーを訪問する予定であるため、例えば七月にグルジアとトルコに行くというのもいいかもしれない。ラーナのおかげでグルジアという国が近くなったような気がする。フローニンゲン：

2018/1/26(金)14:11

No.693: Bela Bartok's Work

I purchased music scores of almost all of Bartok's works because I was struck by his couple of works in the morning. One book that I purchased contains all of his works of mikrokosmos. I look forward to the arrival of these books from the US and UK.

Since I plan to visit Budapest in early April, I must visit Bartok Memorial House. I'll probably encounter his universe of music there. Groningen, 11:47, Saturday, 1/27/2018

2059. 課題の完了

今週も気づけば週の終わりに近づいている。明日からが土日であることが信じられないぐらいに、平日の五日間が光のような速度で過ぎていったように感じる。

今週は日本企業との協働プロジェクト関係での仕事が多くあり、そうした事情もまた平日の時の流れの速さに影響を与えていたのかもしれない。スケジュールを改めて確認してみると、これから三月末までは今週のような平日が続くように思われる。

今日は昼食前にランニングに出かけ、昼食後からは「応用研究手法」のコースの最終課題に取り組んだ。コースを担当するロエル・ボスカー教授の配慮もあり、受講者であるグリジア人のラーナと私の要望を取り入れる形で課題内容を決定し、それほど分量の多くない課題となった。課題の難易度に関してもそれほど難しくはなく、今回のコースで習得した応用研究法のうちの一つが私たちに

割り当てられ、その研究手法を活用するにふさわしい研究テーマを考え、研究デザインを立案することが課題の焦点となる。そして、その研究手法はどういった観点において、因果関係の妥当性を脅かす種々の要因に対処していくのかを説明することも課せられている。自分が設定した研究テーマの背景とリサーチクエスチョンを明記し、その研究デザインに必要となるサンプルの特徴と設定する変数を列挙することも課せられている。最後に、選択した研究手法と自分の研究デザインの強みと限界について記述することが求められている。以上の項目を簡潔にレポートにまとめることが最終課題である。

午後から夕方にかけてこの課題に取り組み、先ほど無事に課題のドラフトを執筆し終えた。この課題が提出されたのはつい先日だが、提出期限も迫っているため、文章を寝かせられるのは今日と明後日のみになりそうだ。明日もう一度文章を読み返し、追加修正を加えた上で、ラーナとお互いのレポートを交換し、フィードバックをし合う。そのフィードバックを元に文章をさらに洗練させてから、明後日の夜にボスカー教授に提出するような流れとなるだろう。

とりあえず、これをもって今学期の全ての課題を終えた。来学期は、オンライン学習に関するコースを一つだけ受講する予定であり、その他にはフローニンゲン大学のMOOCチームと協働する形で研究インターンを行うことになっている。来学期は、大学関連のことに関しては比較的ゆったりとしているが、その代わりに日本企業との協働プロジェクトを複数進めていく必要がある。学術研究と研究成果を活用した実務とのバランスが取れた学期になる、と捉えることにする。フローニンゲン：
2018/1/26(金)20:11

No.694: Continuous Composition Practice

Once I compose one piece of music based on a past composer's work, it would be the best for me to compose another work on the basis of the previous one. This continuous practice enables me to hone my composition skills more effectively and efficiently because my memories about the work still remains clearly.

While composing any work, I always come up with various ideas that I want to try. If I continue to work on the same piece of music, I guess that it is much easier to apply those ideas than I do so long after I composed the work. Groningen, 11:55, Saturday, 1/27/2018

今朝は活力に満ちた形で六時前に起床した。六時半前に一日の活動をスタートさせることができる土曜日というのは、休日初日の一日全体がどこかとても充実したものになるだろうということを予感させる。

起床直後、いつものようにお茶を入れていると、ティーバッグに記されていた言葉に目が止まった。翻訳するならば、「自己が達成する最大の事柄は静寂さになることである」という文言がそこに記されていた。そこに書かれていたことは、ここしばらく私自身が考えてきたことと非常に似ているため、心に響くものがあった。大きな感動というよりも、それこそまさに自己が静寂さになるような感覚がそこにあった。

私たちが成し得る最大の事柄が、仮に静寂さになることであれば、今この瞬間の私たちを振り返ってみるとどのようなことが言えるだろうか。静寂さそのものになっていくよりも前に、自己を取り巻く内外に静寂さは存在しているだろうか。

私たち一人一人の内面世界も現代社会も、どこか静寂さとは真逆の方向に向かって動いてはいないだろうか。そのようなことを考えさせられる。

私はその文言の付された紙をティーバッグから外し、ノートに貼り付けた。

六時半を迎える今この瞬間のフローニンゲンの街はとても静かだ。今日が土曜日ということもあってか、この時間帯に通りを行き交う人や車は皆無である。外側の静けさに呼応するかのように、私の内側も極めて静かである。日々が静かさの中で営まれ、自分自身がますます静寂さに還っていくような確かな感覚。自己の存在とは元来静寂さから出発し、静寂さに帰還することがその歩みであるかのようだ、ということを実感させられる。ノートに貼り付けた先ほどのメッセージは、やはりそのような点を示唆するものなのだろう。

今日は土曜日ということもあり、一日の多くの時間を作曲理論の学習と作曲実践に充てたい。昨日からフォーレの作品を参考にしながら曲を作っている。昨夜初めの何章節かを作ってみたところ、

フォーレの作品から得られる学びは随分と多いことがわかる。これまで範を求めてきた作曲家とはまた違った独特な発想と感性を楽譜の中に見い出すことができる。

昨夜に引き続き、今日もこれからフォーレの作品に範を求める形で作曲実践を行う。一日に一分の曲でもいい。とにかく短い習作を大量に生み出していく。毎日一分の曲を書き続けることができれば、それはいつか巨大な音の建造物になるだろう。

自分には長い曲を作ることの資質も意志もない。ただし、短い曲を毎日継続して膨大に作ることに
関しては、何か自分を捉えてやまないものがある。この、自分を捉えれてやまないものに従って日々
の実践を継続させていくことが、自己が静寂さに辿り着く最良の方法なのかもしれない。フローニン
ゲン:2018/1/27(土)06:42

No.695: Pegasus

Pegasus might not be a mythological creature. Rather, it might be a real creature that resides
within us. It may exist as our vital force to fulfill our daily life. Groningen, 08:36, Sunday,
1/28/2018